



俳句 読売

矢島 渚男 選

海峡は雪も積もらぬなあ鷗

志摩市 岡山 花野

【評】「なあ鷗」が変わって八代重紀の舟唄を思わせる。面白いし、いい句だ。この歌手はデビューの時から知っている。先日亡くなられた。悼句だろうか？

西郷さんの犬の名はツン草萌える

川越市 大野宥之介

【評】上野公園の入口の銅像での発想だろうか。中七のツンに啓発された。季語は「年新た」だったが、一か月待って添削した。ツンか：いい名前だ。

退屈を生きたる幸せ福寿草

姫路市 尻無浜一美

【評】戦争にも災害にも遭わず平凡に退屈に生きられることは幸せなのだと納得する日々。率直さ。

空青く二羽の白鳥遅れゆく

一関市 高橋紗千子

裸木の途切れて橋を渡りけり

山形県 沼沢さとみ

飢え悴む子等あり同じ空の下

羽村市 竹田 元子

海鳴りのとどろくふるとさ淑気満つ

高砂市 池田喜代持

指先に命の宿る手話めくし

飯田市 井原 修

春待つや野鳥凶鐘に黄の付箋

狭山市 長谷部寿子

厳冬のプレーカー落つ闇の中

湖南市 滝井 正之

高野ムツオ 選

湯気のぼる皮を剥がるる兎から

川口市 高橋まさお

【評】野兎の解体場面。皮から立ち上る湯気は本当は見えていないのかも。しかし、兎を悼む作者の心眼が兎の最後の体温を捉えたのだ。

絶え間なく地なる余震寒の星

海老名市 山田 山人

【評】「絶え間なく」は強調かもしれない。しかし、大地震を体験した身にはよく共感できる。揺れ続ける被災地を見守るように寒星が輝く。冬物の紳士バーゲン貴方居す

坂出市 山西 光子

【評】「これ、貴方に似合いそうね。」温かそうだよ。それに若く見えるわ。「安いから買おうよ。」と声を交わす人はもうこの世には居ない。

厚氷砕かれし跡チャイムの音

越谷市 小田 和夫

ガザ地区の女兒を招かん離遊び

東京都 東 賢三郎

ひねもすの地震のテロップ冴返る

川崎市 西 順子

杖へ雪かつては我も美少年

松山市 三木須磨夫

雪合羽泳いで来たそ笑ひけり

北本市 萩原 行博

除染土に名残の雪の悲しさよ

秋田市 松井 憲一

水仙の香をすり抜けてくる汽笛

芦屋市 田中 俊

正木ゆう子 選

蕪ならば貴方の拳ほどと答ふ

東京都 松永 京子

【評】畑の出来を訊ねられたのか。「貴方」はいま畑仕事が出来ず、気が掛かりなのだ。とても省略されているので、意味がわかりにくくはあるが、不思議に心惹かれる素敵な句だ。野もこころも広がりし頃若菜摘む

川崎市 沼田 広美

【評】野が広ければ、心も広くなれる。野が広いから、心が広くなる。平安時代まで遡らなくても、心が弱屈になったら広いところへ行こう。寒さより淋しき感ずききげに

あきる野市 篠宮 紀子

【評】なんと飾り気のない素直な表出だろう。巧みさはなくとも、同じ思いの人の心に届く。寒さと淋しさは似ているかもしれない。

冬ざれの遠くの空の明るさよ

八王子市 梅沢 春雄

雨雲を頭上において葱を掘る

深谷市 酒井 清次

根気よく子犬の躰冬桜

野田市 鈴木 武

木の家や白に始まる冬の闇

羽曳野市 鎌田 如水

樽一つひとつの味に寒造

和歌山市 針谷 国光

降る雪が白で良かったと言っ話

草津市 鈴木 正美

肥後椿ふるさと遠く咲きにけり

大津市 西岡 信夫

小澤 實 選

目を瞑り寄り添ふくら雀かな

栃木県 あらひひとし

【評】「目を瞑り寄り添ふ」と読みおろしていくと老夫妻が日向ぼこもしているかと思うが、ふいに「ふくら雀」が現れ、しっかりと像を結び、堂々として、幸せそうに番だ。冬萌や少年土手を横すべり

千葉市 森田千代子

【評】少年が土手を横すべりに降りていく。スポンの裾や尻を土で汚していそう。取り合わたせた冬萌という季語が、よく響いている。パイロットを夢見る二十初化粧

神戸市 久下 明

【評】初化粧という季語が取り合わされてる。主人公は女性だろう。単に夢想しているだけでなく、それを現実とすべくがんばっている。鶏糞の匂ふ果樹園冬めくし

神戸市 吉野 勝子

うららかや矛を回せば国生まる

八王子市 徳永 松雄

母に供ふ母のレシビのつべ汁

八幡市 会田重太郎

どんと焼き猛る炎と笛太鼓

習志野市 本庄 昭郎

大嘯動かぬ星のなかりけり

東久留米市 飯山徳次郎

箱入りの紅白饅頭成人式

福島市 引地こうじ

孫からの初お年玉我は喜寿

福岡市 佐藤アサ子

ときめき永久に①

俳句あれこれ 池田澄子（俳人）

年末からの掛け軸は毎年、三橋敏雄の「一生の幾箸つかひ秋津洲」に決まっている。

句意の説明は必要ない言葉遣い。こう詠まれて気付くのです。数知れない古今の人間の、私もその中の一人。永い年月をどれ程の人が初めは木の枝を削り用いてか、モノ食んできたのだった。この小さな島で寒さに苦しむ暑さを耐えて愛憎を重ね、或いは見栄を張り兎も角も健気に、それは子々孫々繰り返されてきたのだったと気付かされ、敬虔な気持ちになる。この大認識を季節で区切る。この出来た。貧富の差あり大方は貧しく不幸様々に、生きるため幾たび箸を用いてきたことか。

正岡子規は『俳諧大要』に「俳句は文学の一部なり」「俳句には多く四季の題目を詠ず。四季の題目なきものを雑と言ふ」と定義しています。このお軸、一年中眺めていても大丈夫なので、掛け替えたくない。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭